

コープ災害ボランティアネットワークニュース

【第120号】2023年4月
 東京都生活協同組合連合会
 コープ災害ボランティア
 ネットワーク幹事会
 TEL：03-3383-7800

第19期コープ災害ボランティア基礎講座の第4講はオープン講座として東京都生協連会館会議室とリモート（Zoom）で開催。77名が受講しました。第5講は北村弥生さんの講義と第19期の修了式を行い、29名が修了しCO災ボ会員となりました。

報告

第4講 防災とジェンダー・多様性を生かす災害対策

～だれもが命を守るために～

2023年2月4日（土） 講師：浅野幸子さん



専門分野は地域防災で、内閣府「避難所運営ガイドライン」など、国・自治体の防災政策に関わる。現在は減災と男女共同参画研修推進センター共同代表、早稲田大学地域社会と危機管理研究所招聘研究員。



司会是中村佳子幹事

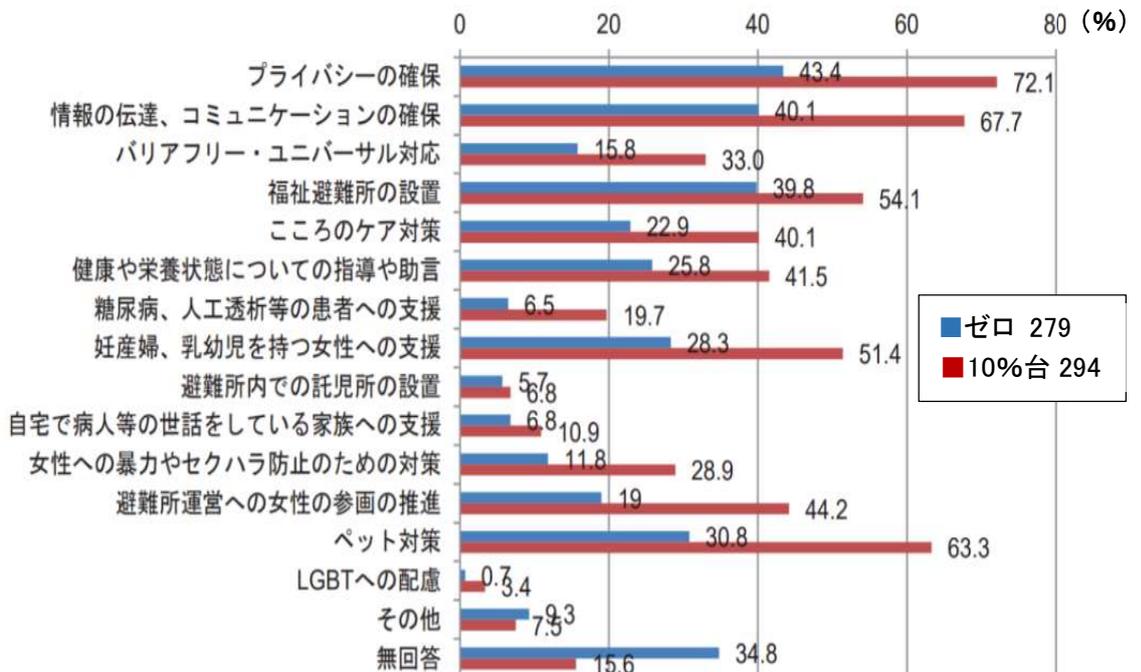
この講座は「防災」と「ジェンダー」と題し、正面から取り上げました。多様性の問題を考える時に、ジェンダーや性別はその中の1つであるのに、重視して取り上げるのはなぜでしょうか。ケアニーズの増大、生活用品など性別の視点による支援や環境配慮の必要性。それに加えて健康で経済力も社会的地位もある男性が中心の社会構造や組織構造が、災害対応の質を上げることが難しくしていることを踏まえて、ジェンダー視点でまず災害課題とその背景要因をみていく必要があるためです。

1995年の阪神淡路大震災は、大都市で起きた震災として教訓を学ぶ必要があります。避難所に入りきらない、避難者が把握できず救援が届かない。そして900人の災害関連死。その後に起きた震災や水害などでも、災害関連死や要配慮者の逃げ遅れが課題として議論されてきました。また、阪神淡路大震災では肺炎やインフルエンザ、2011年の東日本大震災ではノロウイルスが発生し、以前から感染症は問題とされてきました。新型コロナ禍での災害支援体制も、地元の資源を効率よく生かしながら、外部の支援をどう生かすかを戦略的に考える必要があります。大都市の東京ではさらに考えなければならず、そこにジェンダーの視点を入れないと支援の質が上がりません。

2017年の全国調査では防災会議の女性委員比率別が、ゼロの自治体は279、10%台は294でした。それぞれの自治体が持つ避難所運営に関する指針やマニュアルに被災者の命・健康・尊厳・安全に関わる項目の記述には、ゼロと10%台の自治体とでは大きな差がありました。これだけでも支援に差が生まれることは明らかで、会議の構成にも多様性が大事なことがわかります。

《宮城県での事例》

指定避難所に避難した住民たちが民生委員の情報を基に、在宅避難の高齢者世帯や障害者世帯を一斉に安否確認と食料を袋に入れて持って行きました。ここから半年、住民が協力して在宅避難者にも支援物資が受け取れるように体制を作りました。



地域防災力を考える時、平日昼間は高校生以上の通勤・通学者のほとんどが地元を離れているため、女性と高齢者でどれだけ対応できるかを考えないと、現実に即して考えたことになりません。東日本大震災では避難所で亡くなられた方が4000人近く認定されましたが、東京都でも避難所での肉体的や精神的な疲労、避難先の度重なる移転、東日本大震災以上の広域避難が発生すると考えます。

熊本地震では直接死は50人に対し関連死は200人以上。女性は例えばトイレが整備されていないと関連死に繋がります。避難所生活では困難やニーズの多様性を前提にして、要配慮者だけでなくケアをしている人の声を聞き、避難生活で命と健康を守るしくみを考えなければなりません。避難所の運営には主に男性が関わることが多いですが、困っている人への理解や共感や相談しやすい環境のため支援者にも多様性が大事です。また、指定避難所に集中させないために在宅避難が勧められていますが、在宅避難者への支援をどうするかは多くの自治体でまだ十分には議論されていません。指定避難所と在宅避難者をどうつなぐか、どう支援するかを、行政と住民がいっしょに考えていかなければなりません。

自分自身が被災しても共助のために、市民である個人として、生協など所属する団体の一員として地域のボランティア活動に取り組むかもしれません。避難所では性別・立場により被災に違いがあり、生活環境や物資の配布、心身の健康、安全面などの課題があります。被災者は年齢、障害の有無、国籍や母語の違い、家屋構成、就労状況など多様ですが、その全てにジェンダーの要因が関わっているため、支援のリーダーは男性だけでなく、家庭のケアやマネジメントができ意思決定ができる、さらに地域で福祉や子育ての担い手でもある女性も地域のリーダー層に入るべきです。被害を低減するためにはジェンダー視点が不可欠です。



おいらせ町（青森県）避難所開設・運営訓練で、老若男女が車座で対等な立場で会議

質問と講師の説明

Q:女性が防災に参画するとどんな効果があるか？参画してもらうための工夫は？参加する心構えは？

A:防災に女性が参画するイメージは、かなりできてきましたが、実践との距離をどう埋めていくかです。自治会活動やPTA活動など地域で活動している人は、災害後にも必要になる福祉や子育てなどで貢献すること、平時にはいっしょに学ぶことを提案し、つながりを作っていくと良いと思います。地域で活動していない人は周りの女性たちに声をかけ、生協や文化やスポーツサークルなど、グループを作ると参画しやすくなります。待っていれば望む支援が来るとは言えないので、女性が声を出していく必要があります。

Q:「防災とジェンダー」の先進国は？

A:世界的に見ると災害が多いのは途上国や中進国で、被災地で亡くられるのも女性が多いです。国連では2005年から防災においてジェンダー視点を重視してきましたが、例えばかつて災害で多くの女性が

亡くなった東南アジアのある国では、地域の防災活動に女性が参画し、女性が女性の支援をすることは当たり前になっているそうです。2015年のネパール大地震では、地元の女性グループが避難所の中に女性が助け合える拠点として、「セーフスペース」を各地で立ち上げたそうです。こうした国々では開発がジェンダー視点でも議論されてきたので、防災とも関連付けやすいようです。

Q:避難所で多様性への配慮による優先順位の考え方はあるのでしょうか？

A:すぐに命や安全が脅かされる状況をのぞき、できることはやるという姿勢で色々なニーズを出し合いながら取り組むこと。一部の人がやり切れないと、弱者切り捨てにつながります。トップダウンよりも当事者もいっしょに考えてもらい、互いの力を引き出し合えるネットワーク型の協力体制が大事だと思います。

参加者の感想（一部抜粋）

「防災にジェンダーの視点を入れると他の弱者に対する視点が持てる」「災害関連死を考えると防災リーダーに女性の視点が重要。これからの活動でも忘れないようにしたい」「その場の状況で判断していく作業は老若男女問わず、複数人で協力して分担していくことが重要。判断をする人も被災者で、判断するストレスも大きいので、その場でうまく繋がれるとよいなと思った」「ジェンダー視点を入れることで活動の質が上がるのが感覚ではなくデータで示されたことがよかった。多様性を取り入れる大きな動機になる」

ぜひご参加ください！

コープ災害ボランティアネットワーク
第21回総会・学習会

7月15日(土)10時～12時30分

東京都生協連会館3階会議室

(JR中野駅6分、丸の内線新中野駅8分)

案内と議案書は6月初旬に全会員に郵送します

第5講「災害に負けない地域づくり ～講座で学んだことを、どう地域で生かすか～」

3月18日（土） 講師：北村弥生さん



会長は宮本陽子幹事



国立障害者リハビリテーションセンター研究所に勤務し、障害者の災害準備に関する研究に従事。南池袋二三町会防災部長、長野保健医療大学特任教授 NPO 支援技術開発機構研究顧問。

地域活動で得た教訓は「けんかをせずワンチームで長く付き合う」こと。色々な方が集まりますが災害が起きた時はみんなで協力しなければならないので、思うように行かなくても気長に考えましょう。自治体との関係も同様に協力してくださいと思ったら思いっきりほめ、要望や批判はマイルドに。

元々研究者として「さまざまな障害のある人が読むことができる、理解することができる防災マニュアル」の作成に携わってきました。災害時は、自助はもちろんですが互助や共助が大事で、周りに一言かけると互助や共助につながります。日常でも町内に困っている人がいたら、個人レベルの親切心やお節介おぼさんの親切心、地域での共有で助けることができます。災害時には日頃の知恵を生かし、地域みんなのことを考えないとよりよく自分も助からないと思います。

この基礎講座で学んだことを生かすために、まずご近所でも趣味のサークルやこども高齢者の食事サロンなど、どのような関係からでも良いので、3人集まり防災の情報交換や活動する仲間を作ることです。そこから、例えば高齢者の食事サロンが災害時の対応を考えることもできます。災害の備えについて積極的になれないと「どのような災害がいつ起きるかわからない。準備しても無駄だ」とおっしゃるのですが、寝ているときに震度6強の地震が起こった場合で、対策や対応の基本形を考えておき、他のシチュエーションに合わせてアレンジすると大変にはならないと思います。

地域の災害リスクを知るために、例えば国交省の「重ねるハザードマップ」や「浸水ナビ」で洪水・土砂災害・高潮・津波のリスクを、防災科学技術研究所の「地震ハザードステーション」で建物の全壊半壊数や死者数などを知ることができます。スマートフォンでも見ることができる「地震10秒診断」は、住所を入れると、震度に合わせた発生予測、電気・水道・ガスなどのインフラ、全壊確立、出火確立がわかります。身内や職場、出張の行先などの住所を入れて調べることができます。これで何が起こるか把握しておいてほしいです。昨年東京都から報告された「首都直下地震等による東京の被害想定」では、1カ月は生活が混乱すると想定されています。

備えとして、自分や家族に合わせて非常用の持ち出し袋や防災用品を準備しましょう。仲間同士で防災グッズを紹介し合うと話が盛り上がります。地域を知ることも備えになります。「まち歩き」はとても良いので、「一人まち歩き」をしています。東京消防庁公式アプリを見るとまち歩きに役立つ情報を得ることができます。

自治体・社会福祉協議会の災害ボランティアに登録、町会やまちづくり協議会などに入る、防災士の資格を取るなどで、地域の組織と関わることも良いと思います。防災は町会内外で連携しやすい共通テーマです。何かを行ったら報告書を作ることになっています。「今回の課題は何か、得たものは何か」を書いておき、それを個人のホームページやツイッターに載せると、見直すことができ、みんなに見てもらえます。

後半は福田信章さんの進行で、個人ワークと発表

各自シートを使い、自助・互助・共助・公助について「これからしたいこと」「不足すると思うこと」を、「参加前」「3回の講座を終わって」「今後」に分けてどう思っているかを記入し、発表しました。

■自助では10日分を備蓄しています。お風呂のお湯は抜かないで残しています。災害時は心が折れるので食料も美味しいものを備蓄しようと思い、パスタソースや、賞味期限が長いものが欲しくて自衛隊の施設に行っています。この講習を受けて変わったのは、真夏や真冬の災害時の対策も考えるようになりました。普段は東京消防庁の地域災害ボランティアの活動をしています。浸水地域が多い区に住んでいるので、要配慮者の方の避難の話し合いをしています。

- 自助では家族で話し合い、思いを共有しておこうと思いました。共助としては近所の方がわからないのが課題です。公助として防災アプリや備蓄ナビなどを入れてやってみることや、子どもたちと「災害用伝言ダイヤル」を練習してみたいと思います。
- 互助では町会に入っているので防災部があるか防災倉庫があるか確かめてみます。互助では社協の臨時職員や訪問介護員をやっていて、高齢の方や障害のある方と接する機会が多いので、対策を聞いてみます。共助として防災対策を知らない人に向け SNS で今日の講座など発信したいです。制度では防災訓練や安否確認が簡単に多くの方が参加できるようにできると良いと思います。



中野区視覚障害者福祉協会 三宅隆さんより



中野区の総合防災訓練に参加すると違う障害のある方と交流できます。この講座でも普段会う機会が無かった人たちと会い、話し、自分たちのことを知ってもらう機会となり、自分自身が学ぶ機会にもなりました。個人としても中視協としてもありがたく、今後も講座や地域のまち歩きなど、ぜひ声をかけてください。中野区には 600 人の視覚障害者がいます。知っていただくこと、できれば触れ合う機会ができるとよいなと思います。

第 19 期修了式



第 19 期生を代表し、東都生活協同組合組合員の中村明香さんに修了証が授与されました。



続いて西裕子代表幹事から CO 災ボ会員の今後の活動についての説明があり、「災害から命を守るために CO 災ボの活動を活用してください」と、呼びかけがありました。

参加者の感想（一部抜粋）

「頂いた情報をまず検索してみます。まだまだ知らないことが多すぎ何から手を付けてよいかかわからないですが、普段から少しずつ防災減災も意識することが大切だと実感しました」「実際に使用できるツールやご自身の経験談がとても参考になりました」「障害を持つのは大人だけでなく、子どももです。北村先生が言われたように、当事者やその家族、または学校の先生も一緒に考えていかないといけないと思いました」「教えていただいた「10 秒診断」で離れて暮らす家族も確認してみます。旅先の災害チェック、防災訓練での要配慮者対応など参考になるお話ばかりでした」

東京都生協連秋山純専務理事より

CO 災ボ幹事のみなさん、中野視覚障害者福祉協会の三宅さん、北村弥生さんをはじめとした講師のみなさんのお力で、今期は例年以上に地域に密着した講座になったと思います。受講生のみなさんの発言を聴いて、これからの災害ボランティアの活動に生かせる講座になったのではないかと、改めて思います。第 19 期基礎講座の受講、お疲れさまでした。



災害備蓄品ミニ学習会

修了式を終えて、自由参加のオプション企画を行いました。ローリングストックについて復習し、携帯トイレの設置方法や長期保存食品の試食、家庭でも備えられる発電機や蓄電池、カセットボンベストーブなどの防災備蓄品の展示や体験を行いました。オンライン参加者にも会場の様子を中継しました。



体験して気づいたこと

- ・災害備蓄品の食料はただ長持ちし、便利なのだけでなく美味しくなものをキーワードにしてみるのもいいと思いました。
- ・オンラインだったので備蓄品を実際に使用し試食できず残念でしたが、何をどれくらい備蓄しておく必要があるか勉強になりました。
- ・防災食や防災グッズは買って安心ではなく、使い方や食べ方を事前に知っておくことが大事ですね。

「災害ボランティアのトイレ」

(事前質問への講師の説明より)

被災地外から災害ボランティア活動をする場合、被災地に負担や迷惑をかけない配慮は必須です。現地の災害ボランティアセンターは被災者の問い合わせと日々の支援活動に電話を使っているため、ボランティア一人ひとりの問い合わせに答える余力がありません。「アゴ(食事)、アシ(移動手段)、マクラ(宿泊場所)」を確保して被災地で活動しましょう。トイレが使えない状況で被災地に入り活動に取り組むことは、ないわけではありませんが、稀なケースです。

ご参加ありがとうございました。お疲れさまでした！